

# 図書館通信 —73—

1985. 10

## 館長就任に際して

附属図書館長 中村博保

附属図書館は、昭和24年11月の発足以来、発展と充実を重ねてきましたが、いままた学術情報ネットワークへの参加による大きな変革の時期を迎えようとしています。電算化によるこの計画の策定に尽力され、計画を方向づけられた大月前館長のあとをうけて、このたび私が館長の重任をお引きうけすることになりました。大変な時期に責任者の仕事をお引きうけしたというのが実感です。

もちろん電算化は現在少しも目新しいことではありませんが、電算機の導入がもつ意味は、単なる検索手段の能率化にとどまらず、私達がこれから始まる大きな変革の入口にさしかかったことを示しているように思われます。そうした意味で、可能性を尋ねる気持をこめて、ここで感想、あるいは私の理解をしるしてみたいと思います。

こうした計画が立てられた背景には、研究領域の拡大と水準の高次化によって多様化し複雑化しながら増えつづける情報資料の洪水のなかにあつて、それぞれの大学図書館が自己完結的なかたちで研究者の要望に応えることが不可能になってきたという認識がありました。電算機ネットワークによる学術情報システムの設置は、このような時代の要請をうけて計画されたものであつて、一次情報の収集整備と提供機能の充実のほか、全国的な情報検索システムの整備、わが国独自のデータベースの形成が目標とされています。この計画は、自然科学系の情報検索のシステム化を緊急の課題としており、当面は理科系の学問に資するところが大きいと思われませんが、長い射程で考えるならば、文科系を含めた学問の全体、考えようによってはむしろ文科系の学問の将来の地平を新しくひらくことになるように思われます。というのは、現在進行しつつある変革は、図書館がはじめから内在させてきた原理が、機能的なかたちをとって現れたものだと考えられるからです。図書館の歴史をひもとけばわかるとおり、図書館は、

その国の文化、あるいは人類の知がモデル化されて、かたちをとったものです。書物や情報の収集・蓄積は、人類の知の体系がそれ自体発展する体系であるのと同じように、それ自体の発展の原理にしたがって行われていて、分化し、総合され、発展しながら、その内部につねに新しい知の回路を蓄積させてきました。電算機による検索の簡便化も、実はそうした図書館独自の原理、知の発展と自己検索につながっていると思います。現有する膨大な蔵書のデータベース化は大変な課題ですが、将来整理が進むにしたがって、蓄積の相互をつなぐ構造的なもの、つまり本当の意味での文化の全体が研究の対象とされることになるように思います。図書館の原理が発展する知のシステムだと申しましたが、その段階で新しい情報システムは、まさしく研究の成果相互の記号的関係を可視化するシステムとして機能することが予想されるわけです。

現在図書館員の皆さんには、例えば年間約2万6千冊の図書を限られた人数で整理するという大変な仕事をおねがひしていますが、更に今後、器械類の操作と情報内容の両面にわたって高度な習熟が要請されることになるわけで、敬意と期待をこめて新しい事態への対応をおねがひしたいと思つています。

### — も く じ —

館長就任に際して……………	1
延長開館の現在	
インディアナ大学図書館の24時間開館…	2
夜行性人間の夢・常時開館……………	2
図書館にて考えること……………	3
報告書作成の場として……………	4
〈係から…1〉参考調査係……………	4
〈参考図書を紹介と使い方〉	
MRとZbl……………	5
昭和59年度図書館統計……………	6

## 延長開館の現在

昭和54年11月の延長開館実施以降早や5年余を経過し、やや定着しつつある現在、4人の方から意見を寄せていただきました。読書の秋を迎え、よりよき発展を皆様とともに考えて行きたいと思えます。

現在本館は通常平日は夜の8時45分まで、土曜日は夕方の4時45分まで開館を行っております。浜松分館は少し後れて昭和58年4月から実施しておりますが、分館では2階のフロア（学術雑誌が置いてある）に限り夜間入館装置を備え付け、専用カードを持っていれば常時（当分夜の12時まで）利用出来るようにしてあります。

近代日本の大学図書館はその理想像を断えず欧米に求めてきました。延長開館もその一つといえるかと思えますが、本学においても私達自身の未来像を求めつづけていきたいものだと思います。

### インディアナ大学図書館の 24時間開館

教育学部 住居学 外山 知徳

アメリカ合衆国インディアナ州の州都インディアナポリスからクルマで30分ほどのところにブルーミントンという小さな町がある。町の半分がインディアナ大学で、あとの半分がダウンタウンという、いわば大学町である。

そこに私は半年ほど滞在したのだが、大学図書館が24時間開館していると聞いて驚いたものである。さすがに貸し出し業務は夜中の10時までだったように記憶しているが、書庫で徹夜できるのである。書庫の壁際の所々にデスクの溜りがあって、院生以上は自分の席をキープできるようになっている。所定の手順さえふめば、書庫の本を自分のデスクに置いておくことが許されている。所定の手順とは、帰るときは決められたカードを上にとび出させて本に挟み、デスクの本棚に立てて置くことである。そうすると館員が回ってきた時にカードをちぎっていく。どうやらそれでその本の所在がコンピューターにインプットされる仕組みになっているようであった。また、その本が借り出し請求されると、そのことを知らせるカードが本に挟まれて、デスクの使用者に伝えられる。気付かずに放っておいても、2日ほどすると自動的に貸し出しに回される仕組みである。

さすがに徹夜までしたことはなかったが、私もデスクを一つキープしておおいに利用させてもらった。それにしてもどうして24時間開館などができるのか、今だに不思議である。当時、そのことに特別の関心をもっていただけではなかったのが不明な点ばかりであるが、人手は学生アルバイト

トをかなり使っていたようである。しかし深夜は研究者以外、職員の姿は見かけなかったが、日本では無責任な管理態勢ということで通らないことかもしれない。もちろん、徹底したコンピューターの導入がそうしたシステムの前提になっていることは確かであるが、やはり文化の違いとしか言いようがないのかもしれない。24時間開館といっても、そう始終徹夜の利用者がいるはずもないが、たまさかの利用のためにそれだけのシステムを維持するというのは文化的な豊かさ以上に底力さえ感じるのである。

### 夜行性人間の夢・常時開館

理学研究科 化学専攻 修士2年

竹内 亨

普段、ろくに図書館に居座ったことなどない人間が、その日、P.M. 6:00過ぎに暗い自然科学系外国雑誌の部屋で、「Chemical Abstracts」なるものを、ごそごそ引いていたがために、今宵、原稿用紙を前に悪戦苦闘する破目に陥っている。

元来、私は、図書館のあの「赤の他人と対峙」する座席や、「蛍光灯のぶら下がった衝立」の前では落ち着いて調べものや勉強などする気にはなれないので、必要な書籍は借り出してしまおうことにしている。加えて、理学部には図書室なるものがあり、主要な文献を拾うのはそこで間に合うことが多いので、先の「ケミ・アップ」を引くとき以外には図書館に長くいることはまずない。文科系の学生のように図書館に棲む必要もない。それでは、おまえにとって延長開館は何の意味もないのかと問われれば、そういうことは「断じて無い」と答えるしかない。

そもそも、研究を進めるにあたって思考が中断

させられることほど致命的なことはない。疑問が生じた場合、速やかにこれを解決しなければならない。そのためには勝手なようだが、図書館に閉っていて欲しくないのである。話しかわるが、過去の通信に「延長開館時の利用状況」についての統計を載せて、「もっと利用しましょう」的な議論がある。しかし、これは筋ちがいの考えで、一人でも利用者があれば図書館は門を開くべきでそれが図書館の責務であると信じる。

ところが、理想と現実の差はいつの世も甚だ大きいようで、図書館の常時開館などは夢の夢と言えそうである。本文献を書くにあたり、付け刃の勉強を行った結果、延長開館実施の障壁は詰まるどころ「人」と「金」の問題であることが繰り返して議論されてきたことがわかった。中でも、80%は「金」で解決できるとされているから、要はいかに多く予算を分取るかにかかっているようである。では、どうすれば予算の増額や図書館職員の定員増を勝ち得ることができるか。それには、少々時間がかかるが、実績で示すしかない。「静岡大学は投資効率の良い大学である。」と認めさせる以外に手はない。入試の難易や地方大学であるなしに拘わらず、そこで行われている研究内容は間違いなく世界のトップ・レベルであるはずだから。静大生諸君、頑張って良い仕事を出しましょう。

最後に、劣悪な労働条件下で努力奮闘されている図書館職員の方々に感謝します。

## 図書館にて考えること

理学研究科 数学専攻 修士2年

平松良平

私は昨年10月以来、事務補佐員として窓口事務に携って参りました。図書館を学生がどう利用するか、どのように利用してもらうか無関心ではいられない立場に立ったというわけです。その中で、少し気づいた点について書いてみたいと思います。

第1点目として、これは以前から言われてきたことですが、開館時間が8時45分までですが、閉架図書の利用が6時までしかできないことです。そうしたことがどこまで必要であるかといった論議や予算面での制約があることも事実でしょう。しかし、一方で6時以降は、図書館の利用条件が制約され、一部にしる、利用者が不便を被っていることも事実です。

第2点目として、図書館の利用法が意外に学生に知られていないということです。図書の借り出

し方も時として説明しなければならなくなり、やや面くろうこともあります。図書館があまり学生にとって、なじみ深いものと言えない面の象徴といえなくもありません。

私が静岡大学への入学当初、「大学の図書館は知識の宝庫であり、そこへ行って知的な刺激を受けないものは、学問に対する態度を考えなおしたほうがよい。」という文意の文章を読んだ記憶があります。当然のことながら、学問の刺激は、書物のみから得るものではありません。しかし、書物を通して、自らの経験で得られるものを超えて、より広い世界、より多くの人々と接することができることも事実です。大学生活の中で何を読み、何を吸収できるかということは非常に重要なことです。そういった意味で、大学教育の中で図書館がこういったものに位置付けられるかという問題も重要なことです。

自らの専門を学んでいく中で、基本的に身に付けなければならないことは自ずと定ってくるものです。それに従って、学ぶべき古典も定ってきます。このことは、人文科学に限らず、進歩発展の著しい自然科学の分野においても同様でしょう。ただ、古典の古典たる由来は、その後の学問の発展にもかかわらず、その内容が本質的であるが故に、そこで問題にしていることが今日性を持っているということです。ですから、今日的意味で古典を読みこなすためには、その後の学問の発展を含めてみる必要があります。

以上の観点から静岡大学の附属図書館の蔵書を見ると、充足されているといえない状況にあると思います。特に、学部生にとって、現在の状況とアカデミックな部分を結びつける環が大いに不足しているように思います。抽象化された物を追いかけることは、重要な訓練ですが、一方で、学問を途轍もなく無味乾燥なものに変えてしまう面も持っているものです。その恐れを補い、助けるものが、図書館に眠る書物であるように思います。

そして、学生の足を図書館から遠ざけている原因の1つには、大学の授業の中でレポートを出す場合を除いて本を読むことを強制されない（強制されないということはある意味で良いことなかもしれませんが）ことです。授業と図書館が有機的に結びついていないということです。色付けが授業に必要といえるでしょう。

大学の図書館に求めるものが学生にとってより高度なものとなれば、現在の図書館の状態では決して満足のいくものではないでしょう。そうした時点で、延長開館におけるサービスの状況も再度論議されるべきといえるでしょう。

## 報告書作成の場としての図書館

人文学部 3年 <sup>き</sup>木 <sup>また</sup>全 健

レポートなどを作成するさいは、やはり図書館がいい。

適度の静けさが、心を落ち着かせ、集中力を高めてくれる。それは物音一つせず、心臓の鼓動の音のみが聞こえるというような静けさではない。それではかえって不気味で、不安を感じてしまうではないか。周囲に注意を向ければ、ページをめくる音や、筆記用具を走らせる音などが聞こえてくる。こうした適度の刺激が、膠着しかけた思考をリフレッシュさせてくれるし、消沈しかけた気分を活性化してくれる。全く図書館の雰囲気は独特のものだ。真剣さや緊張感、あるいは切迫感が感じられるかと思えば、逆に安堵感や休息感も感じられる。この雰囲気が注意を集中するのに適しており、それゆえに思考を加速させることができ、能率を良くすることができる。調子がのってきて、アイディアがバカスカ湧いてくるときなどは、図書館には、他の空間よりも知識が多量に存在しているのではないかと考えてしまうこともある。要するに、図書館が有している、日常生活では少しお目にかかれぬ場が、知的作業には向いているのだろう。

資料や文献が、豊富にそろっていることも、レポートを作成するさいにはウレシイ条件の一つだ。資料の不足は、レポートの内容を信頼性の薄いものにしてしまうし、変化起伏のない単純なものにしてしまう。ところが資料を活用すれば、記憶の確認ができるし、自己の見解に説得力を持たせることもできる。そればかりか、その見解を発展展開させることさえできる。それに沈思黙考では、思考が偏向したり、独断に走ってしまうことがあるが、それを防ぐこともできるのである。さらに、調子が悪くて、アイディアが浮かんでこないとなれば、資料の内容を応用したり、変形したり、批判したりして、その場をしのぐことができる。

まことに、知的作業には不可欠の資料や文献が身近にあり、手軽に利用できるというのは、図書館の便利な点だ。そのうえ、資料などに困ることが少ないというのも、気分的には非常に楽なことである。なぜなら、レポートの作成中に疑問や不鮮明な点が生じて、少しの手間を惜しまなければ解決できるという安心感をもたらしてくれるからだ。

本当に図書館はレポートに向いている。夜間も使用できるから、昼間講義が詰まっているときなどはアリガタイことである。(ちなみにこの作文も図書館でやりました。)

## 延長開館中の在館者数 (昭和59年度)

——月および時間別平均値——

延長開館日数	18時(土:14時)時点	20時(土:16時)時点
4月 16日	31.0人	18.6人
5月 25日	35.2人	23.9人
6月 25日	46.6人	30.6人
7月 17日	58.2人	43.4人
8月	—	—
9月 23日	58.0人	37.9人
10月 26日	39.3人	26.8人
11月 24日	41.4人	26.6人
12月 17日	41.9人	25.1人
1月 16日	51.5人	34.6人
2月 23日	64.5人	44.5人
3月 14日	16.6人	10.3人
平均値 (226日)	44.8人	29.9人

〈係から…1〉

### なんでもや?べんりや?

参考調査係 内線268

正式名称“参考調査係”、もっと一般的には“参考係”とか“レファレンス”とか呼ばれているようです。【図書館と本に関することは何でも御相談下さい!】本当はこんな看板を掲げた方が良いのかもしれませんが。「紹介します! 便利ですよ、この係は! 本場に便利なんですから!」(……あれ! べんりやなのかな……!)[よろず相談係なんていうのはどうですか? え、なんでもやさん!](……そういわれて見れば、なんでもやなのかも……)。皆様から大変 Now い名称を頂戴したようで恐縮しております。

レファレンスはアメリカの公共図書館で種々の事情で学校へ行く暇のなかった人々が図書館で必要な本を探し出すのを手伝った事に始まったとか。どんなささいな事に対しても参考となるような本を探し出し、できる限り時間をかけて調べさせていただく事を旨としております。

「この本をコピーしたいんですが。」「では、申込書を書いて下さい。」「この本をどこかの図書館で持っていないでしょうか。」「では、調査してみます。」「このあいだ頼んだ論文のコピーはまだ届いていませんか。」「もう少しお持ち下さい。(……何しろ相手もあることなので……)」「早く欲しいんだがなあ……」等々。

ヨミタイモノヲ、ヨリハヤク…

…何しろ限られた人数(3人)で円滑な学術情報提供の一端を担うべく連日悪戦苦闘しております。

まだまだ未熟な本学のレファレンス業務とは思いますが是非御利用と御支援とをお願いします。

## 〈参考図書の紹介と使い方③〉

### MRとZbl

佐藤 宏 樹

1. はじめに MR, Zblはそれぞれ *Mathematical Review*, *Zentralblatt für Mathematik und ihre Grenzgebiete (Abstract)* の略称である。まずおことわりから。この小文の対象となる読者が目に浮かばないことによる焦点ボケの心配があること。以前、図書館通信の「ケミカルアブストラクト」の紹介文中その冒頭で筆者は「例年春になると、新4年生が何冊ものCAを机に積み上げ、終日頁を繰る姿が見られる……」と述べ、その人々を対象に記事を書いたとっておられます。しかしMRやZblを手にする4年生がいるとはまず思えません。4年生はまだまだ基礎知識が不足しており、とても論文を読める(書けるではない!)までに至っておりません。彼らはMRやZblの存在すら知らないのではないかと思います。一方、数学者はしばしば利用しており、今更というところでしょう。大学院生は数も少なく、MRやZblの使い方は、教官や先輩に聞いたりしながら自分で身につけていっているようです。更に数学に関心を抱く人達にとっても、この雑誌は余り関係ないのではないかと勝手に解釈したりして書く元気をなくしています。しかし少しでも役に立てばと考え筆を取りました。

2. MRの紹介 数学の論文の評論から成るアメリカ数学会から刊行されている雑誌。創刊は1940年と比較的新しい。現在は年に13冊(a~m号)とMidyear Index, Annual Indexが刊行されている。現在約2,200の数学の雑誌、Monographic Seriesに掲載された論文の評論を載せている。評者はその分野のトップクラスの数学者が当たっており、その論評は高く評価されている。従ってその論評は論文の価値判断に影響を与えることが多い。しかし評者の主観が強く入っているのもあり、余り信頼しすぎるのは危険である。やはり論文の価値は自分で論文を読んで判断するよう心掛けるべきであろう。数学の多様化、論文の量産化に伴い、MRも変化して来ている。1940~50年は年1巻10号、51~60年は年1巻11号、61年は年1巻12号となり、62~79年は年2巻、各巻6号で、1980年以降現在のスタイルとなっている。

3. Zblの紹介 数学の論文のAbstract(摘要)を掲載したドイツSpringer書店発行の雑誌。静岡

大学には59巻から入っている。約1,450の数学の雑誌に掲載された論文のAbstractを載せている。利用上便利のように、Vol.110より10—Volume Indexといて10巻ごとにその前の9巻のIndexが、またVol.300より50—Volume Indexといて、それまでの49巻のIndexがまとめられている。内容は初めに述べたように数学の論文のAbstractである。この場合MRと異なるところは、論文の論評よりも内容の紹介に重点が置かれていることである。著者自身がしばしば自分の論文のAbstractを書いている。たとえば日本数学会の雑誌(J.Math.Soc.Japan)に論文を掲載する場合、acceptされた段階でZblの原稿も数学会へ提出することになっている。論文の内容を早く知るにはMRよりもZblによることの方が多い。

4. MRの使い方 IndexにはSubject IndexとAuthor Indexがある。Subject Indexで調べるときには、Mathematical Subject Classification(今後MSCと書く)が必要となる。(Annual Indexの終わりにリストがある。)数字とアルファベットにより数学の分野を分類したリストである。最初の2桁の数字は大分野を表す。たとえば、00—08は歴史、基礎論等、10~58は代数、解析、幾何のいわゆる純粋数学の各分野、60~94は確率、統計、O.R.、コンピューターサイエンス、経済、生物科学などのいわゆる応用数学の分野を表す。

ある特定分野の論文のリストを知りたい、またその論文を見たいときはどうするかを考えてみよう。まずMSCでClassification Numberを知る。次にSubject Indexでその番号のところを見れば、その方面の論文のリストが載っている。この中の特定の論文の論評がみたいときは、その論文の番号がたとえば、84m:32029ならば、1984年のm号の32の項の29番目を見ればよい。更にその論文を見たいときは、論評中で掲載雑誌名、年、巻、号、頁を調べる。雑誌名は略記されているから正式名を知りたいときは、Annual Indexの終わりにあるAbbreviations of Names of Serialsで調べればよい。

別の使い方として、特定の数学者の論文リストを知りたいときは、当りまえのことだが、Author Indexで調べればよい。

5. Zblの使い方 MRとほぼ同様。MSCもMRに従っているから見やすい。更に50—Volume Indexがあるから、分野別の論文リストを探すにも特定の数学者の論文リストを探すにもMRより便利である。

6. おわりに 以上長々と書いてきたが、MRもZblも共に内容はそれらの表題で尽きている。使い方も難かしいことはなく、自分で当たってみれば自然と身につくものである。(理学部 数学)

昭和59年度図書館統計

■利用統計

(1) 貸出・閲覧

本館 (学部別)

区分	利用対象者数	貸出 (冊数)					
		閲覧 (冊数)	出納	開架	出納	合計	
学部	人文教育	704	3,931	8,129	2,789	10,918	
	理	1,034	2,306	8,607	1,515	10,122	
	農	379	151	6,792	97	6,889	
	農	297	39	1,040	15	1,055	
	生	人文教育	749	356	3,505	217	3,722
		理	1,035	1,128	4,509	233	4,742
農		404	164	2,749	64	2,813	
工		319	50	1,466	53	1,519	
院 生 等	1,016	67	2,826	21	2,847		
小 計	257	431	2,286	632	2,918		
教職	443 (297)	—	404	5,510	5,914		
員	—	—	—	6,922	6,922		
員	740	—	404	12,432	12,836		
学 外 者	—	434	—	—	—		
合 計	6,934	9,057	42,313	18,068	60,381		

浜松分館 (層別貸出)

区分	貸出冊数
学 生	6,168
院 生 等	2,025
教 職 員	967
合 計	9,160

(2) 貸出・閲覧

本館 (学生・分類別) (冊数)

区分	閲覧		貸 出	
	出納	開架	出納	合計
0 総記	139	365	62	427
1 哲学	302	2,265	328	2,593
2 歴史	855	3,136	909	4,045
3 社会	1,068	10,121	1,691	11,812
4 自然	102	13,330	303	13,633
5 工学	98	1,923	157	2,080
6 産業	128	1,408	169	1,577
7 芸術	129	2,192	240	2,432
8 語学	406	1,215	355	1,570
9 文学	2,025	5,954	1,422	7,376
雑	3,805	—	—	—
合 計	9,057	41,909	5,636	47,545

※上記の貸出冊数以外に、雑誌の一夜貸しが926冊あります。

浜松分館 (分類別貸出) (冊数)

0 総記	233	4 自然	3,108	8 語学	19
1 哲学	15	5 工学	5,285	9 文学	72
2 歴史	36	6 産業	4	雑 誌	309
3 社会	57	7 芸術	22	合 計	9,160

(3) 文献複写統計

区分	本館			浜松分館			
	人数	件数	枚数	人数	件数	枚数	
依頼	学生	508	548	3,795	426	1,059	7,302
	教官	1,621	1,695	19,573			
受託	学内	2,309	3,627	14,921	72	127	972
	学外	883	1,116	8,535	358	473	3,370

外国への文献複写依頼 (本館)

区分	件数	枚(コマ)数
学 生	3	379
教 官	210	4,562
合 計	213	4,941

相互貸借冊数

区分	本館	浜松分館
貸 出	25	0
借 用	222	4

■増加図書統計

( ) 内は昭和59年度末の累計

	本館			浜松分館		
	和漢書	洋書	計	和漢書	洋書	計
0 総記	676 (31,509)	196 (8,379)	872 (39,888)	59 (3,350)	6 (800)	65 (4,150)
1 哲学	1,017 (21,176)	626 (12,879)	1,643 (34,055)	7 (2,920)	19 (539)	26 (3,459)
2 歴史	1,760 (39,491)	540 (7,490)	2,300 (46,981)	6 (1,599)	0 (214)	6 (1,813)
3 社会	5,347 (114,660)	2,846 (35,019)	8,193 (149,679)	18 (3,326)	1 (425)	19 (3,751)
4 自然	1,734 (53,524)	1,541 (44,816)	3,275 (98,340)	786 (22,160)	1,067 (26,117)	1,853 (48,277)
5 工学	932 (19,447)	510 (3,404)	1,442 (22,851)	1,123 (30,917)	593 (19,123)	1,716 (50,040)
6 産業	1,256 (32,289)	327 (6,373)	1,583 (38,662)	6 (615)	0 (23)	6 (638)
7 芸術	663 (16,426)	99 (2,624)	762 (19,050)	8 (1,694)	0 (272)	8 (1,966)
8 語学	1,071 (15,209)	1,084 (10,283)	2,155 (25,492)	27 (2,968)	8 (2,106)	35 (5,074)
9 文学	1,610 (46,500)	1,427 (30,394)	3,037 (76,894)	7 (3,607)	1 (823)	8 (4,430)
計	16,066 (390,231)	9,196 (161,661)	25,262 (551,892)	2,047 (73,156)	1,695 (50,442)	3,742 (123,598)